色彩学	二時	同	同
図案法	二時	教授	島田 佳矣
英語	四時	助教授	森田亀之助
体操	六時	講師	鈴川 信一
		配属将校	神保豊次郎
		講師	斎藤 幸晴

（「大正九年十二月ヨリ要書類綴　教務掛」による。）

この表の顔触れからも明らかなように、教師の半数以上は本校卒業者であるが、その中でも松田義之と高橋吉雄は図画師範科の卒業生で、白浜徴の愛弟子であった。松田は明治二十四年十一月愛知県一宮町生まれ。大正六年図画師範科卒業後青森高等女学校教諭、三重県立神戸中学校教諭等を経て同十年五月本校助教授となった。高橋は同じく明治二十四年四月盛岡市生まれ。大正六年図画師範科卒業後、東京市橋本尋常小学校訓導、同富士見小学校訓導、府立第六高等女学校教諭を経て同十五年八月本校助教授となった。白浜の担当していた「図画教授法」「教授練習」はこの二人の後継者に引き継がれたのであった。

② 図画師範科回想（故松田義之氏談話筆記）

〔編者は十数年前に長谷川信也氏（昭和八年図画師範科卒）に随伴して松田義之氏（昭和五十六年歿）宅に伺い、同氏の本校在学及び在職中のことを話して頂いたことがある。そのときの談話筆記を纏めて、ここに紹介しておく。〕

私は大正三年の入学だが、入学式は印象的であった。講堂には先生方がずらりと並び、一流の人たちが最前列に並んでいて、正木直彦校長が例の訥弁で、考え考えしながらゆっくり話す。「君らは入学を許されたが、ここに一流の先生方が並んでいる。だから、うんと先生方の知恵を搾り取れ。お寺の鐘のように、うんと力を出して大きい声を出させなければならん。」と諭されたのであった。正木校長は食堂で昼食後の雑談の折りなどはよく一人で喋っていたが、とても良い話だった。

師範科の授業は本科とは全く別個に行われた。本科とはなるべく引き離しておく方針だったらしく、従って本科生との交流は少なかった。学科のうち、まず白浜徴先生の図画教授法は、主に『新定画帖』について詳しく説明するのであったが、理論的のものでなく、むしろ極めて実践的な内容で、特に先生の板書（ばんしょ）は比べるものが無いほど見事だった。先生はくだけた人であったが、一面非常に厳格なところがあって、素行、態度に厳しく、教官室でも先生の前では皆タバコを吸わなかった。生徒が髪を長く伸ばしていたりすると、教官室へ連れて行って自ら刈ってしまうのであった。

他に、東洋美術史は大村西崖、沢村専太郎、西洋美術史は矢代幸雄で、矢代先生はまだ大学を出たばかり。西洋の絵について感激して教えるから、生徒に大変人気があった。解剖学は久米桂一郎の担当だったが、これは師範科には不要なので、のちに削られた。用器画法は小島憲之。この人は一高の教師で、一番怖い先生だった。修身ははじめ高師教授の乙竹岩造が、次いで女高師教授の下田次郎が担当したが、二人とも教科書無しの堅い話をされた。それに対し

て、私が助教授になった頃修身を担当していた菅原教造は極めてデカダンの教育者で、笑い絵のようなものを沢山カバンに入れて持っており、修身の授業でセックスの話なども堂々と喋るといった風だった。白浜先生が心配して私に「君、行って聴いて来い」と言うので、生徒の後ろの方で聴いていたものだった。その後、和田英作が校長となった。倫理道徳を教えるのは校長などが一番良いのだが、和田という人は非常に潔癖な人で、自分はそんな人格者ではないからと、高島米峰に依頼した。高島の講義は社会学的倫理とでも言うべきもので、身近な実例を挙げながら極めて平易に説いた。

学科は他に英語、美学、色彩学などがあり、教授練習の授業は、皆で時々余所の学校へ行き、その中の代表者が教授の練習をやるのだった。体操は主に赤間運蔵の担当で、この人は生徒の名を覚えることにかけては天才的だった。

実技のうち、絵画は日本画と西洋画を一週間交代でやり、三年になってからどちらかを選択することになっていた。西洋画は田辺至の指導で、殆どデッサンばかりやり、油絵は少ししか描かず、水彩はやらなかった。日本画は一年では主に動植物写生、二年では人物写生（日本画式デッサン）で、模写は狩野派や白描のものを少しやった。文庫には荒木寛畝や川端玉章のつけたて没骨の絵が沢山あって、私は暇があるとそれを模写したから、絵が達者になった。彫刻は手工の一部としてやった。水谷鉄也の指導で、一年では石膏デッサン、二年以降はモデルを使って制作した。

書道は一年から三年まであったが、これをやると学校に赴任して書道も受持つことになり、負担が増えるのが嫌で、なるべくやらない連中が多かった。担当は岡田起作で、手本を書いてくれた。だが、非常にやかましい先生だったので、生徒は逃げてしまう。二十人試験を受けて免状を貰ったのは五、六人だった。この先生が老いて、その後比田井天来、小琴（仮名専門）夫妻が教え、天来の歿後は尾上柴舟、石橋犀水が教えに来た。

私共の卒業のときは論文と作品を提出したが、論文などは誰も見ない。作品に関する考え方は本科と同じで、特に教育者のための絵を習うわけではない。しかも本科五年と師範科三年では卒業制作の段階で当然差が出るから、皆本科に負けないようにと一生懸命やったものである。ただし、白浜先生は師範科は飽くまで教師になるための科であるから、絵描きになりたいなら本科へ行けと言い、何もかも教師向きにやった。仲間にピカソやマチスの真似をした者があったが、先生はそんなことをしてはいかんと言われた。

師範科教師として母校に戻ったときは実に忙しかった。手工、用器画法、日本画、西洋画の授業の外に理事としての事務的な仕事や卒業生たちの世話もしなければならず、しかも月給は七十五円だった。師範科在学、在職を通して見て、その教育内容自体には余り大きな変化は無かったように思われる。絵画の内容が多少変化したこと、解剖学授業が削除されたこと、戦争激化とともに軍事教練が盛んになったこと、澤田源一校長時代〔昭和十九年〕に教員全員が辞表を出したことなどを除けば、目立った変化というものは無かった。

③ 高村光雲喜寿祝宴、木彫科への寄附金

昭和三年四月十六日、名誉教授高村光雲の喜寿を祝う宴が催され